

# 平家物語

## 一四 禿童

かむろ

かくて清盛、仁安三年十一月十一日歳五

にんあん

☆

十一にて病に冒され、忽ちに出家入道す。

たちま

じやうかい

法名を「浄海」とこそ名のられけれ。その

しるし

しゆくびよう

故にや、宿病立ち所に癒えて、天命を全

また

うす。人のしたがひつくこと、吹く風の草木

すんこの人さび  
くさき  
くさき

をなびかすがごとし。世のあまねくあふげ

清盛にこそ  
それちぬはえとあがりもれよは

ること、降る雨の国土を潤すに同じ。「六

きんだち

クハクハもハハら

波羅殿の御一家の君達」とだに云ひてしか

ば、**華族**も**英雄**も肩を並べ、おもて面を向かふる

にゅうどうしやうこく こじゅうとへい

者もなし。入道相国の小舅平大納言時忠

ときただ

きやう

の卿の宣ひけるは、**☆**この一門にあらざら

平家の人問は人の形とてこゝろに神であら

ん者は皆人非人たるべし」とぞ宣ひける。さ

☆縁をひすなだ

れば、「いかにしてもこの一門に**結ばれん**」

えもん さしぬき 着方

とぞしける。衣文の指貫のかきやうよりは

えぼし た折下

じめて、烏帽子の矯めやうにいたるまで、

はえん

「六波羅様」とだにまねた云ひてしかば、一天四海

の人皆これを学ぶ。

けんおうせいしゆ

いかなる賢王聖主の御まつりごと、摂政

処置も

関白の御成敗をも、世に余されたる徒者

いたずらもの

などの、かたはらにてそしりかたぶけ申す  
ことは、常の習ひなれども、このゆゑは、入

はかりごと

わらんべ

道相国の 謀 に、十四五六の 童 を三百人

かぶろ

ひたたれ

そろえて、髪を禿に切り廻し、赤き直垂を

着せて、召し使はれけるが、京中に満ち満ち

わうばん

おの

て往反しけり。自づから平家の御事を悪し

いちにん

きさまに申す者あれば、一人聞き出ださる

るほどこそあれ、三百人に触れまほして、そ

しきりちよぶぐ

つごうぐ

の家に乱れ入り、資材雑具を追捕して、その

る 引手立さまに。

奴を搦めて六波羅に率て参る。されば目に

見、心に知るといへども、言葉にあらわして

とんえん

申す者なし。「六波羅殿の禿」とだに云ひて

ければ、道を過ぐる馬、車も、皆よけてぞ通  
しける。「禁門を出入りすといへども、姓名

けいし ちようり

を尋ねらるるに及ばず。京師の長吏ここれが  
そば見こ見ぬひりをした  
為に目を側む」と見えたり。